

大阪赤十字病院 国内外の救援活動 2021

Japanese Red Cross Osaka Hospital International Medical Relief Department



大阪赤十字病院 国際医療救援部
公式フェイスブックで日々国内外の人道支援活動をアップしています
<https://www.facebook.com/355328871229152/>



2020年と言うまでもなく新型コロナウイルスに翻弄された1年でした。3月末には海外で活動していた職員を全員帰国させ、以後はリモートでの支援に切り替えたり、中断したりする事業もありました。その一方で新型コロナウイルス感染症に対応した外来用に国内災害用フィールドホスピタルを病院前に設営しました。



日本赤十字社 大阪赤十字病院
Japanese Red Cross Society

人間を救うのは、人間だ。 Our world. Your move.

日本赤十字社が保有する海外用野外病院 Emergency Hospital



手術室



集中治療室



滅菌室



分娩室



病棟



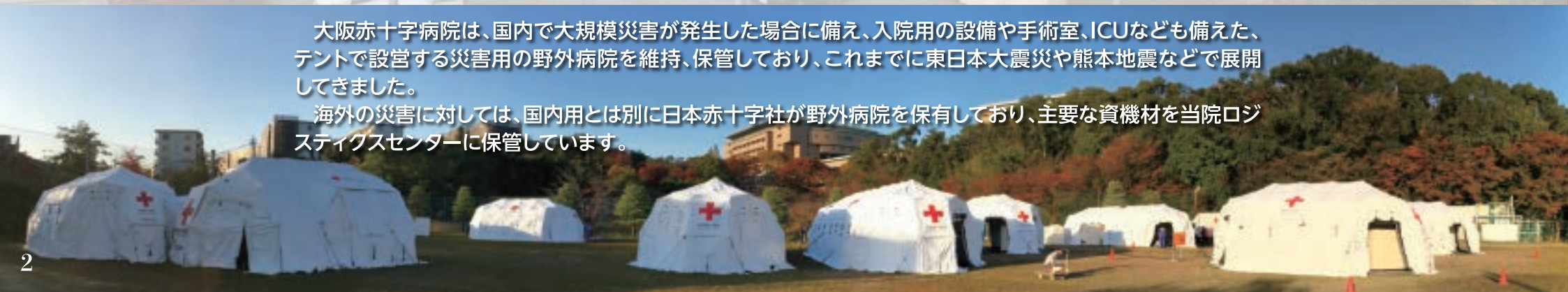
キッチン



ランドリー

大阪赤十字病院は、国内で大規模災害が発生した場合に備え、入院用の設備や手術室、ICUなども備えた、テントで設営する災害用の野外病院を維持、保管しており、これまでに東日本大震災や熊本地震などで展開してきました。

海外の災害に対しては、国内用とは別に日本赤十字社が野外病院を保有しており、主要な資機材を当院ロジスティクスセンターに保管しています。



2020年当院海外派遣職員より

中東医療支援事業(レバノン)



あまり日本には馴染みがないと思いますが、レバノンを含む中東はまさに戦争の歴史です。人種、宗教、宗派の違いなどから争いが次々と起こってきました。



レバノンにいるパレスチナ人には国籍も国家資格も与えられません。言葉がわからない外国で孤独に勉学に励み、医師、看護師となるのです。

われわれは彼らの救急医療の向上に取り組んできました。ただ、新型コロナウイルス感染症が発生し、アジア人は突然、排除される対象となりましたが、救いの手を差し伸べてくれたのがパレスチナ人であるユーゼフ院長でした。新型コロナウイルス感染症の基本的な知識、われわれの活動の意味を住民に伝えてくれたのです。われわれはそれを機に再び住民に受け入れられました。

ロックダウンにより緊急出国、突然別れのときが来ましたが、院長からはひたすら感謝の意を伝えられました。われわれも感謝することは多くありましたが、感極まり一言も伝えられませんでした。一生忘れられない活動となりました。もう一度レバノンに戻って、役に立ちたいと心の底から思います。

(救急部医師)



中東医療支援事業(ガザ地区)



イスラエル領内ガザ地区は、1948年に戦禍を逃れて来たパレスチナ難民とその子孫を含めて190万人の人が生活しています。2007年以降はイスラエルによる封鎖により、領外への移動が制限され、医師・看護師も地区外へ出る許可が得られにくくなり、知識のアップデートが困難となりました。また、物流にも制限がかかっているため、医療資源の安定供給にも不安があります。そのような状況に対し、限られた資源のなかでも質の高い医療を提供することを目標に、診療プロトコルや看護技術手順書の作成、診療の質の改善のための技術支援をパレスチナ赤新月社が運営する病院で行っています。

2020年3月以降は新型コロナウイルス感染症の流行により、リモート支援へと移行しました。試行錯誤の毎日ですが、現地スタッフとともに今できることをコツコツと続けています。コロナ禍で遠隔支援など課題は多いですが、現在の活動が現地医療の改善の一助となることを願っています。

(救急部看護師)



中東医療支援事業(リモート支援)



新型コロナウイルス感染症の影響で、2020年は3月末で全員が海外派遣先から引き上げることになりました。しかしながら支援を突然やめるわけにはいきません。当部から当院の医師・看護師と現地とをインターネットでつなぎ、リモートでの支援を継続しています。

リモートでの支援は、顔を突き合わせてのコミュニケーションと比べると、いろいろな意味で困難をともない、特に医療支援をリモートで行うのは正直難しいです。結局できることはこれまでで行ってきたことのモニタリングやデータ収集、解析などに限られてしまっていますが、一方で支援側であるわれわれが見放していないということを彼らに伝えることも大事だと考えて続けています。

(国際医療救援部)



新型コロナウイルス感染症への対応

2020年は病院にとって、ある意味で1年中災害下で活動しているともいえる1年でした。状況に応じてさまざまな対応が求められましたが、当院が維持管理する国内災害用のフィールドホスピタル(ホスピタルdERU)も、新型コロナウイルス感染症の外来として4月初めより病院前に展開しました。

病院としては、新型コロナウイルス感染症の患者さんとそれ以外の患者さんが、できる限り接触しないようにする必要があります。このため、ホスピタルdERUのうちテント3基とレントゲン室を正面玄関左に設営し、病院入り口の手前でトリアージを行い動線を分けるよう対策を行いました。



受付



待合室



当院正面玄関左に設営したホスピタルdERU



注意書き掲示物



テレビ取材風景



レントゲン室



PCR検査室



診察室



トイレ

2020年当院国内派遣報告

クルーズ船〈ダイヤモンド・プリンセス号〉医療支援(横浜)



▲クルーズ船の医療スタッフと

クルーズ船ダイヤモンド・プリンセス号内で新型コロナウイルス感染症の集団感染が確認されたため、同船は2月に横浜港に帰港後、停泊を余儀なくされ、乗客乗員ともに入国できない状態となっていました。このため厚生労働省は、乗客乗員の新型コロナウイルス感染症対応をDMAT(厚生省災害医療チーム)に、それ以外の疾病や健康被害への対応を日本赤十字社に依頼しました。これを受けて日本赤十字社は、当初関東、中部地方の赤十字病院から医療チームを派遣していましたが、船内の乗客乗員の半数以上が日本人以外であったため、2月中旬に国際医療救援拠点病院である当院にも要請があり、医師1名、看護師2名、事務職1名の4名を派遣しました。

日本赤十字社は、船内にもともとある医務室で、同船の医療スタッフと新型コロナウイルス感染症関連以外の体調不良者の診療にあたるということになっていましたが、実際には発熱者もわれわれの医務室に来られたり、また当時は全乗客乗員のPCR検査も行われていなかったため、医務室全体をレッドゾーンと認識して活動しました。

医務室は簡単な検査やレントゲンも撮れる充実した設備で、診療した乗客乗員は、日本人とそれ以外が半々という状況でした。また、他の日本の医療チームからの要請で通訳も行いました。

活動終了後は、一般の人と接触しないように当院から港まで車両で迎えに来てもらい、各自宅へ送ってもらいました。その後運転手を含めて2週間自宅待機し、14日目にPCR検査で陰性を確認し、病院に復帰しました。

国内派遣としては初の感染症対応となり、閉鎖空間での活動や活動終了後もストレスが続くなど、これまでになかった医療支援で、今後の体制作りに学ぶことも多い派遣でした。



▲診察準備



▲事務職がデータ入力

軽症者用ホテル支援(大阪)



◀ホテル内のゾーニング

▼診察準備

新型コロナウイルス感染症の蔓延に伴い、病床がひっ迫するというおそれから、大阪府は入院している軽症者をホテルへ移し、ホテルで療養してもらうという方針を策定し、4月大阪市内のホテルを借り上げ、新型コロナウイルス感染症の療養所を立ち上げました。

この立ち上げにあたって、ホテル内のゾーニングの確認や入ってくる軽症者に対応するため、当初の2週間医療チームをホテルに派遣してほしいとの要請が、大阪府より当院に入りました。

当院では大阪府庁からの要請を受け、当院の医師1名、看護師6名、薬剤師1名を2週間派遣しました。医師と看護師は、ゾーニングのアドバイス、大阪府内の病院から移送される入院患者さんの受け入れ、ホテルで療養中の患者さんの体調不良者の診療にあたり、薬剤師は薬剤の相談などを行いました。

ホテルでの療養は、患者さんのストレスも大きく、一日も早く新型コロナウイルス感染症が収束することを願うばかりです。



院内災害訓練

2020年は新型コロナウイルス感染症の関係で人が集まる訓練を中止し、訓練もオンラインとしました。
あらゆるオンラインシステムを使って情報交換します。

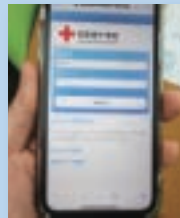
オンラインの
訓練って
どんなの？



大阪府防災無線を使う



職員安否確認システムで全職員に発信



防災センター



透析センターから市内連携クリニックと情報交換



薬剤部から衛星携帯で
提携している卸さんへ
連絡



FAXで発注



災害時に連携する近隣赤十字病院／管内協力病院へ
入院患者搬送連絡



衛星通信を使う

2020年新型コロナ下での「国際医療救援部」



活動が大幅に制限されるなか、当部の院内での活動の一部を紹介します。



新型コロナ下でも国内災害が起こったときに
フィールドホスピタル(ホスピタルdERU)をいつでも出せるよう、
常に点検、整備を行っています。



国内、海外問わず、会議はすべてオンラインになりました。



月1回の国際活動の勉強会は、オンラインでも配信するようになり、参加者が増えました。
勉強会の参加方法は、適宜当部署フェイスブックで案内しています。



院内のさまざまな機器や棚を、地震に備えて固定する作業を行いました。

たくさんの応援メッセージとともにご寄付をいただきました

2020年は新型コロナウイルス感染症に追われる一方で、
100社を超える企業様、個人様から、
たくさんのこころのこもったメッセージとご寄付をいただきました。
改めて御礼申し上げます。



大阪赤十字病院 国際医療救援部

〒543-8555 大阪市天王寺区筆ヶ崎町5-30 TEL:06-6774-5111 (代表)

<https://www.osaka-med.jrc.or.jp/aboutus/international/index.html>